

終章

これからの生物文化多様性

京大大学生態学研究センター准教授 酒井 章子

近年、生態学や環境問題に関わる人の間では、森林をはじめとする生態系が人間にもたらす恩恵を一括りに「生態系サービス」と呼ぶようになった。生態系サービスには、食料やエネルギーの供給、水や大気の浄化、レクリエーションの場の提供など、様々な機能が含まれる。本書で登場した多様な森の恩恵も、生態系サービスの一部である。しかし、本書のタイトルであえて「森のめぐみ」という言葉を使ったのは、その恩恵を意識すること、森と関わること、その過程で生まれるものの意味を考えようとしたからである。

日本では、人が手を加えることで森が信仰の対象となり大切にされてきた（第1部 永松）。森林への宗教的な感情や森林を大切に思う感情は、森林へ関わり、働きかけ、その結果を見ることによって育まれるという論は腑に落ちる。「森のめぐみ」を利用すれば、利用している資源ばかりでなく森の状態もわかる。森と関わることは、そのような認知力と感受性を社会の中に維持することである。生物文化多様性が高く認知方法が多様であるほど、感受性が研ぎ澄まされいろいろな変化のサインをキャッチできるだろう。

序章にもあるように、現在のわたしたちと森との関わりは、かつてのそれとはまったく違ったものとなった。高度経済成長前の日本では、人の生活はそのすぐ傍らにあった森と切り離せないものであった。しかし、現在のわたしたちは物やサービスにたくさん選択肢を持ち、森と関わらずとも生活することができる。森と関わることは、生活必需品ではなく嗜好品となった。また、森との関わり量が減った一方で、恩恵を受ける森林の地理的な範囲は広がった。たとえば、昔から行われていたきのこ狩りや山菜採りであっても、採集にでかける範囲は広くなった（第1部 齋藤）。和紙の原料にいたっては、海外からの輸入品が多くを占めるようになった（第1部 田中求）。国内はよい、海外はよくない、ということではないが、本書のテーマからいえば、森（生産地）の姿を想像できない利用は、森と関わっているとはいえない。

いろいろな森林の恩恵をつまみ食いの的に利用することが可能になって生じた問題の一つは、利用のつながりやフィードバックが途切れ、調整が効かなくなったことだ。本書の中で何度も言及されている獣害では、昔はシカやイノシシの害を抑える効果を

持っていた生業としての狩猟の衰退が、問題を深刻にしている（第2部 田中俊徳）。きのこ狩りや山菜採りでは、遠方から来る人々が増えた結果、資源を持続的に利用するための配慮や工夫のない採取が問題となっている（第1部 齋藤）。

このように一度途切れた利用のつながりは、どのように再構築できるのだろうか。一つの鍵は、つながりの切れた「森のめぐみ」に、いかに価値を与えられるかという点にある。ここでいう「森のめぐみ」は、古くから使われていたもの、伝統的なものに限らない。新しい建築技術（第3部 腰原）、これまで見過ごされていた資源の発見（第3部 飯田）が、利用の輪をつなげることもある。利用の輪は、これまでよりも空間的に大きく、より複雑なものになっていくだろう。

市場に出回る代替品は、シカ肉に対する家畜の肉のように、「森のめぐみ」より安価・均質であったり、薪に対するガスや石油のように、利用が容易であったりする。「森のめぐみ」が利用されるためには、物の背後にある「森との関わり」が大事である。特定の森林や地域を価値づける「ブランド化」は、本書の複数の章で言及されているキーワードの一つである。

もう一つの鍵は、「森のめぐみ」や「森の価値」を共有する人々のネットワークやコミュニティの構築にありそうだ。地域の中で森の持続的な利用を目的に意識的に組織されることもあるが（第2部 野田）、都市の登山グループが登山道の整備に関わる例に見られるように、かならずしも地域的に閉じたものとは限らない（第2部 愛甲）。ユネスコエコパークのような制度は、対象地域の価値を国際的に共有するネットワークの構築ともいえる（第3部 湯本）。これとは正反対に小さな地域単位の、薪供給を目的とした「薪づくりグループ」や里山住宅博から創りだされた里山コミュニティも興味深い（第2部 寺田）。

これからわたしたちは、どのような生物文化多様性を築いていくのだろうか。まず予想できることは、人や情報がかつてないスピードで行き来する結果として、地域的な文化の違いは失われていくだろうということだ。残念な面もあるが、それは必ずしも生物文化の多様性が失われるということとイコールではない。綾町にやってきた芸術家が照葉樹林からインスピレーションを得て新たな作品を創造する（第3部 湯本）、新しい技術を使ってこれまで存在し得なかった木造建築物を造る（第3部 腰原）、というように、物理的空間やこれまでの伝統に縛られない生物文化に置きかわっていくのではないだろうか。

社会全体を見れば、森との関わり方は、より多様になっていく可能性もある。ロングテール現象とも呼ばれるように、社会の情報化は需要の小さい商品の流通を可能にした。多様な生物と人との関わりから生まれた、主流にはなれない「森のめぐみ」にとっては、情報化は追い風になるはずである。情報技術や交通・流通手段の発達により、利用者の地理的な範囲が広がったことで、かつてのように地域の人が濃密に恵

みを享受するという関係性だけではなく、地理的に広い範囲の中で、一部の人のみに利用されるという生物文化も生まれている。かつて地域外に出回ることの少なかったジビエは、都市の消費に支えられているし（第2部 田中俊徳）、山菜採りの代行サービス（第2部 栗山）もその典型例だろう。必然的に社会の中で森との関わりの濃淡が生まれるが、それも21世紀の生物文化の新たなカタチだといえる。

最後に、ライフスタイルや価値観といったものの投影としての生物文化の重要性が高まっていく点に着目したい（第2部 寺田）。マジョリティーではないかもしれないが、そのような価値観を持つ人々が、少しずつ流れを変えつつある。そのような流れをより強めていくためには、個別の「森のめぐみ」、森林との関わりに加えて、「森のめぐみ」を豊かに享受できる多様な暮らし方や社会のあり方を、利用のつながりにも配慮しながら、トータルに考えていくことが重要なのではないだろうか。

本書では、森と関わる暮らし方、社会のあり方を提案するには至っていない。しかし、各章には、それらを考えるためのヒントが詰まっている。未来にどんな森林と生物文化を遺すのか。未来の子どもたちに、どのように森と関わり、どんな「森のめぐみ」を享受してほしいのか。本書がそのような考えを巡らすきっかけとなったならば、編集者としてうれしい限りである。